

## 研 究

NICU に入院した早産児に対する  
父親の愛着の変化とその関連要因村田佐知子<sup>1)</sup>, 山口 孝子<sup>2)</sup>, 堀田 法子<sup>2)</sup>

## 〔論文要旨〕

NICU に入院した早産児に対する父親の愛着の変化およびその関連要因を明らかにするために、質問紙調査とカルテからの情報収集を行った。入院時、退院時の両時点でデータ収集が可能であった56名を分析対象とした。Maternal Attachment Inventory Japanese Version の合計得点（以下、MAI-J 得点）は、入院時の中央値91.5点に比べて退院時94.0点と有意に上昇した。入院時から退院時において、MAI-J 得点が不変または増加した群は、MAI-J 得点が減少した群に比して勤務時間が短く、育児時間が長く、育児支援者に祖父母（父親自身の親）を挙げ、看護休暇を利用している者が多かった。

Key words : NICU, 愛着, 早産児, 父親

## I. はじめに

親子間の愛着について、母親は自己の体の変化によって直接的に胎児の存在を感じられ、胎児への愛着が強いと出産後新生児への愛着が強<sup>1)</sup>、新生児への早期接触は愛着形成に影響がある<sup>2,3)</sup>。また、早産児の母親はNICUに児が入院することで母子分離状態になることから愛着形成が促進されず、虐待など養育に問題が起きるといふ報告もあり<sup>4)</sup>、母子間の愛着形成に関する研究は正産産・早産ともに多くみられる。

父親も母親同様、早期に子どもと触れ合うことや育児行動は愛着に影響があり<sup>5-7)</sup>、早産児の父親もNICUでの面会で子どもと直接的な関わりを積み重ねることは早産で生まれた子どもを知り、父親としての実感が得られる過程である<sup>8)</sup>。しかし、父親は母親と異なり、親になることを実感する身体的変化がないため、父子間の愛着形成は母子間とやや異なる傾向にあ

る<sup>9)</sup>。また、早産児の父親の場合、児との接触の他に愛着に関連する要因を明らかにした研究は少ない。そこで、NICUに入院した早産児に対する父親の愛着の変化とその関連要因を多角的に検討することで、父子間の愛着形成促進を支援するための示唆を得ることができると考える。

## II. 研究目的

NICUに入院した早産児の入院時から退院時までの父親の愛着の変化およびその関連要因を明らかにした。

## III. 用語の定義

愛着とは、人が特定の他者との間に形成する情緒的な結びつき、「愛情のきずな」と定義され、最早期には基本的に乳児の状態を敏感に気づき、接近し保護する養育者などの存在を前提として成立するもので、誕

Alteration of Paternal Attachment for Preterm Infants in NICU and Its Related Factors

Sachiko MURATA, Takako YAMAGUCHI, Noriko HOTTA

1) 名古屋市立大学病院（看護師）

2) 名古屋市立大学看護学部（研究職）

別刷請求先：山口孝子 名古屋市立大学看護学部 〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1

Tel/Fax : 052-853-8049

(2710)

受付 15. 2. 2

採用 15.11.10

生直後から養育者との相互作用は重要である<sup>10)</sup>。そのため、本研究では親が子どもに対して持つ感情や思いを愛着とした。

#### IV. 研究方法

##### 1. 調査対象

A 県内 A 大学病院 NICU に入院した在胎週数37週未満の早産児の父親。

##### 2. 調査期間

2011年5月～2012年10月。

##### 3. 調査方法

NICU 入院時と退院時の自記式質問紙調査とカルテから情報収集した。研究者らは病棟から入院の連絡を受け、NICU 入院時の質問紙調査は医師から子どもの病状説明がなされた初回面会後に依頼した。入院時は記名式とし、退院時は無記名だが連結した番号が付記された質問紙を研究者らが直接配布し、回収は病棟に回収箱を設置して各自で提出してもらった。退院時に直接質問紙を渡せなかった場合は、対象者の配偶者に同意を得たうえで質問紙を渡し、後日郵送にて回収した。

##### 4. 調査内容

入院時の質問項目は Maternal Attachment Inventory Japanese Version (以下, MAI-J), 父親の基本属性であり, 退院時の質問紙項目は MAI-J, 夫婦関係満足尺度, 社会支援, 愛情を感じた育児ケアであった。なお, MAI-J と夫婦関係満足尺度は尺度作成者の使用許可を得て用いた。カルテからは, 子どもの基本属性として在胎週数などを情報収集した。父親の面会頻度は, 面会回数を入院日数で除して算出した。

##### 5. 測定尺度

###### 1) MAI-J

Muller の尺度を辻野らが日本語版に翻訳し, 信頼性と妥当性を検討した<sup>1)</sup>。子どもの誕生後の母子関係における母親の情緒を測定でき, これは母親の子どもへの愛着行動の推測もできる。尺度は, 母親と新生児との間で発達する愛着を母親側から測定することを目的とし, 母親が経験する子どもに対する考え, 気持ち, 状況が測定できる26項目で構成されている。出生後の

愛着は共通の概念であるとされ, MAI に下位尺度はない。「だいたいいつも」(4点), 「しばしば」(3点), 「ときどき」(2点), 「めったにない」(1点) の4件法で回答する。MAI-J 合計得点 (以下, MAI-J 得点) の範囲は26～104点であり, 得点が高いほど愛着が強い。

###### 2) 夫婦関係満足尺度

ノートンの尺度を諸井が翻訳し作成した<sup>11)</sup>。普段妻との関係について持つさまざまな気持ちや態度を測定することを目的とし, 6項目で構成されている。「かなりあてはまる」(4点), 「どちらかといえばあてはまる」(3点), 「どちらかといえばあてはまらない」(2点), 「ほとんどあてはまらない」(1点) の4件法で回答する。得点の範囲は6～24点であり, 得点が高いほど夫婦の関係性がよい。

##### 6. 分析方法

データの集計・分析には統計解析ソフト SPSS-Ver19.0を用いた。基本統計量の算出の他, Wilcoxon の符号付き順位検定, Mann-Whitney の U 検定, Fisher の直接法で分析し,  $p < 0.05$  を有意とし,  $p < 0.1$  を傾向ありとした。

##### 7. 倫理的配慮

名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会(承認番号: 10027-2) の承認を得た後, 名古屋市立大学病院の院長の許可を得た。研究対象者に, 研究目的と方法を口頭と文書で説明し, 文書で同意を得た。いつでも参加を断ることが可能であり, 断ることによる不利益がないこと, 得られたデータは秘密を保持し, 研究以外には使用しないこと, 個人が特定されないよう配慮すること, データは研究終了後に破棄することを説明した。

#### V. 結果

入院時の質問紙は70名に依頼, そのうち1名は同意が得られず, 69名より回答が得られた。退院時の質問紙の配布数は59名であり, そのうち56名より回答が得られた。今回は, 両時点から回答が得られた56名を分析対象とした。

##### 1. 基本属性

父親の年齢は中央値35 (最小値24～最大値52) 歳, 結婚期間は49 (1～210) か月, 家族形態は「核家族」50名 (89.3%), 「拡大家族」6名 (10.7%), 子どもは

「あり」23名(41.1%)であった。職業は「正規職員」48名(85.7%),「自営業」8名(14.3%)で、勤務時間は10(6~24)時間,家事時間は1(0~6)時間,育児経験は「あり」20名(35.7%)で、育児時間は0(0~7)時間であった。今回の妊娠・出産の希望は「あり」54名(96.4%),「なし」1名(1.8%)であり、母親教室への参加は「あり」14名(25.0%),立会い出産の希望「あり」24名(42.9%)であった。

子どもの在胎週数は35(28~36)週,出生体重は2,158(989~3,570)gであり,疾患は「あり」8名(14.3%),呼吸器使用は「あり」35名(62.5%)であった。

## 2. 入院中の状況

入院日数は中央値23(最小値4~最大値273)日であり,面会頻度は0.46(0.08~1.00)日で2~3日に1回であった。支援状況での家事支援は「あり」43名

(76.8%)で,育児支援は「あり」39名(69.6%)で,支援者はともに「義母」が多かった。職場支援は「あり」39名(69.6%)で,休暇の取得は「有給休暇」,「看護休暇」,「育児休暇」を利用していた。面会時に行った育児ケアで子どもに最も愛情を感じたケアは「抱っこ」35名(62.5%)であり,次いで「清潔ケア(沐浴,体拭き)」9名(16.1%),「授乳」5名(8.9%)であった。

## 3. 退院時の夫婦関係満足度

退院時の夫婦関係満足尺度の合計得点は,中央値21(最小値12~最大値24)点であった。

## 4. 入院時と退院時の愛着の変化(表1)

入院時と退院時のMAI-J得点を比較したところ,中央値91.5(最小値51~最大値104)点から94.0(58~104)点と有意に上昇した( $p=0.001$ )。項目毎に見て

表1 入院時と退院時のMAI-Jの変化

	入院時 N=56		退院時 N=56		p
	中央値	最小値~最大値	中央値	最小値~最大値	
1. 赤ちゃんに愛情を感じる	4	2~4	4	2~4	0.458
2. 赤ちゃんといると心が温まり幸せである	4	2~4	4	3~4	0.250
3. 赤ちゃん和二人だけの時間を過ごしたいと思う	3	1~4	4	1~4	0.375
4. 赤ちゃんとの生活を楽しみにしている	4	2~4	4	2~4	0.963
5. 赤ちゃんを見ているだけで満足である	3	2~4	4	1~4	0.322
6. 赤ちゃんが私を必要としているのがわかる	3	1~4	3	1~4	0.003
7. 赤ちゃんはかわいいと思う	4	3~4	4	3~4	0.414
8. 自分の赤ちゃんであるのがうれしい	4	2~4	4	3~4	0.458
9. 赤ちゃんが笑うと,特別な気持ちになる	4	1~4	4	2~4	0.141
10. 赤ちゃんの目を見るのが好きである	4	1~4	4	2~4	0.004
11. 赤ちゃんを抱くのが楽しみである	4	1~4	4	2~4	0.317
12. 眠っている赤ちゃんをみつめる	4	2~4	4	2~4	0.808
13. 赤ちゃん和親しくしたいと思う	4	2~4	4	2~4	0.157
14. 赤ちゃんのことを他の人に話す	4	1~4	3.5	1~4	0.305
15. 赤ちゃん和一緒にいるのは喜びである	4	2~4	4	2~4	0.739
16. 赤ちゃんを抱きしめるのが楽しみである	4	1~4	4	2~4	0.346
17. 赤ちゃんを誇りに思っている	4	1~4	4	1~4	0.135
18. 新しいしぐさをする赤ちゃんを見るのが好きである	4	1~4	4	3~4	0.285
19. 私の思いは赤ちゃんのことでいっぱいである	3	1~4	3	1~4	0.502
20. 赤ちゃんの人格がわかる	2	1~4	2	1~4	0.001
21. 赤ちゃんは私を信じてほしいと思う	4	1~4	4	1~4	0.074
22. 私は赤ちゃんにとって大切な人だと思う	4	2~4	4	1~4	0.963
23. 赤ちゃんの望んでいることがわかる	2	1~4	2.5	1~4	0.004
24. 赤ちゃんに特別な注意を向けている	3	1~4	4	2~4	0.001
25. 赤ちゃんが泣くとあやしたくなる	4	1~4	4	2~4	0.013
26. 赤ちゃんを愛するのはやさしいことである	4	1~4	4	1~4	0.142
合計	91.5	51~104	94.0	58~104	0.001

Wilcoxonの符号付き順位検定

みると、「赤ちゃんが私を必要としているのがわかる」(p = 0.003)など6項目で退院時の方が有意に高くなった。

5. MAI-J 減少群と MAI-J 増加群における父親・家族・子どもの特性, 夫婦の関係性, 社会支援との関連 (表2-1, 表2-2)

入院時から退院時において, MAI-J 得点が減少した群を MAI-J 減少群, MAI-J 得点が増加または増加した群を MAI-J 増加群とした。MAI-J 減少群, MAI-J 増加群で父親・家族・子どもの特性および夫婦の関係性, 社会支援との関連を分析した。父親の特性の「勤務時間」では, MAI-J 減少群より MAI-J 増加群の方が有意に短く (p = 0.024), 「育児時間」で

MAI-J 増加群の方が長い傾向を示した (p = 0.075)。家族の特性, 子どもの特性, 夫婦の関係性では有意差はみられなかった。社会支援では, 育児支援において MAI-J 増加群に「あり」が多い傾向を示し (p = 0.067), 「祖父(父親自身の親)あり」(p = 0.041)に有意差が, 「祖母(父親自身の親)あり」(p = 0.086)に傾向がみられた。職場支援では, MAI-J 増加群に「看護休暇あり」が多い傾向がみられた (p = 0.086)。

VI. 考 察

1. 属性および入院中の状況について

本研究対象の勤務時間は中央値10時間であり, ベネッセの調査では0歳児の父親の平均実働時間/日は11時間以上が最も多かったことと比べるとやや短かつ

表2-1 MAI-J 減少群と MAI-J 増加群における父親・家族・子どもの特性, 夫婦の関係性, 社会支援との関連

	MAI-J 減少群 n=19		MAI-J 増加群 n=37		p
	中央値	最小値~最大値	中央値	最小値~最大値	
父親の特性					
年齢	35	27~47	35	24~52	0.755
結婚期間 (月)	45.5	8~210	63	1~121	0.809
勤務時間	10	9~5	9	6~24	0.024
家事時間	1	0~2	1	0~6	0.381
育児時間	0	0~2	0	0~7	0.075
面会頻度	0.5	0.3~0.8	0.5	0.1~1.0	0.917
		n (%)		n (%)	
育児経験	あり	4 (21.1)	あり	16 (43.2)	0.143
今回の妊娠・出産の希望	あり	18 (94.7)	あり	36 (100.0)	0.345
立会い出産の希望	あり	7 (36.8)	あり	17 (45.9)	0.578
母親教室への参加	あり	3 (15.8)	あり	11 (29.7)	0.338
家族の特性		n (%)		n (%)	
同居	あり	2 (10.5)	あり	4 (10.8)	1.000
祖父 (父親自身の親)	あり	2 (10.5)	あり	2 (5.4)	0.598
祖母 (父親自身の親)	あり	2 (10.5)	あり	0	0.111
祖父 (父親の義親)	あり	0	あり	0	-
祖母 (父親の義親)	あり	0	あり	2 (5.4)	0.544
子ども	あり	6 (31.6)	あり	17 (45.9)	0.394
子どもの特性		中央値		中央値	p
在胎週数		35		35	0.767
出生体重		2,130		2,174	0.545
入院日数		18		23	0.304
		n (%)		n (%)	
呼吸器使用	あり	11 (57.9)	あり	24 (64.9)	0.772
疾患	あり	1 (5.3)	あり	7 (18.9)	0.243
夫婦関係		中央値		中央値	p
		22		20	0.248

Mann-Whitney の U 検定  
Fisher の直接法

表2-2 MAI-J減少群とMAI-J増加群における父親・家族・子どもの特性、夫婦の関係性、社会支援との関連

		MAI-J減少群	MAI-J増加群	
		n=19	n=37	
		n (%)	n (%)	p
社会支援				
家事支援	あり	14 (73.7)	29 (78.4)	0.745
	祖父 (父親自身の親)	あり 0	5 (13.5)	0.155
	祖母 (父親自身の親)	あり 8 (42.1)	14 (37.8)	0.780
	祖父 (父親の義親)	あり 1 (5.3)	8 (21.6)	0.146
	祖母 (父親の義親)	あり 9 (47.4)	20 (54.1)	0.779
育児支援	あり	10 (52.6)	29 (78.4)	0.067
	祖父 (父親自身の親)	あり 0	8 (19.4)	0.041
	祖母 (父親自身の親)	あり 4 (21.1)	17 (45.9)	0.086
	祖父 (父親の義親)	あり 2 (10.5)	11 (29.7)	0.181
	祖母 (父親の義親)	あり 7 (36.8)	21 (56.8)	0.259
	友人	あり 1 (5.3)	3 (8.1)	1.000
職場支援	あり	11 (57.9)	28 (75.7)	0.223
	育児休暇	あり 1 (5.3)	3 (8.1)	1.000
	看護休暇	あり 0	6 (16.2)	0.086
	有給休暇	あり 7 (36.8)	19 (51.4)	0.399

Mann-Whitney の U 検定

Fisher の直接法

た<sup>12)</sup>。職業に関しては正規職員が88.4%であり、経済的には比較的安定している状況がうかがえる。妊娠希望は92.8%と大部分を占めており、立会い出産希望も約半数であったことから、出産に肯定的感情を持っている人が多いと考える。

愛情を感じた育児ケアでは抱っこが62.5%で半数以上を占めていた。これは、沐浴や授乳ではその手技に集中しなければならず愛情を感じる余裕がないのに対し、抱っこはゆったりとした気持ちでわが子を見つめ、会話できるためであろう。既報でも、抱っこして子どもの重さを感じて父親の自覚が生じることや、父親の自覚と愛着には関連があった<sup>13,14)</sup>。そのため、面会時には積極的に抱っこを促すことが父親の愛着を促進することにつながると考える。

退院時の夫婦関係満足尺度の得点は中央値21点であった。先行研究において、1歳半の健常児の父親の得点が平均21.0点とあり<sup>15)</sup>、本研究対象と厳密な比較はできないが、子どもが早産であることと夫婦関係には関連がみられないことが考えられる。

## 2. 入院時から退院時までの愛着の変化

入院時および退院時のMAI-J得点は、それぞれ中央値91.5点、94.0点であった。父親を対象に本尺度を使用した先行研究がないため参考までに正常分娩の母

親の産褥5日と産褥1か月のMAI-J得点を見てみると、それぞれ平均94.5点と101.8点であり<sup>2)</sup>、父親は母親よりも低値である可能性がある。前述したように、母親は妊娠中より胎児と生物—心理的な関係を基盤にしているのに対し<sup>1)</sup>、父親は社会—心理的な関係を基盤にするため、母親より愛着形成に時間がかかるうえ、今回は早産児であったことやNICU入院により親子が共に生活できないことから、さらに愛着形成はされにくかったと考える。

MAI-J得点の入院時と退院時の変化では、退院時の合計得点が有意に増加していた。これは、入院中の関わりが愛着形成に影響したと推察される。項目で見ると、入院時から退院時にMAI-J得点が増加した6項目中5項目「赤ちゃんの目を見るのが好きである」、「赤ちゃんの人格がわかる」、「赤ちゃんの望んでいることがわかる」、「赤ちゃんに特別な注意を向けている」、「赤ちゃんが泣くとあやしたくなる」は、中島の報告にある愛着をベースとする子どもとの関わりにおける確かさであり、【関わり確かさ】と命名されている<sup>16)</sup>。また、早期に子どもと触れ合うことや育児行動を行うことで、子どもへの愛着が形成されることから<sup>7,17)</sup>、NICU入院時の子どもの状況を把握しながら、父親が子どもと触れ合う機会を作り、できる範囲で育児ケアへも参加できるよう支援することが必要と考える。

### 3. MAI-J 減少群と MAI-J 増加群における父親・家族・子どもの特性, 夫婦の関係性, 社会支援との関連

勤務時間は MAI-J 増加群の方が MAI-J 減少群に比べて短く, 育児時間においては MAI-J 増加群が長い傾向がみられた。乳幼児をもつ親の仕事観では, 仕事は自分の中で何より大切なものと捉えているが<sup>18)</sup>, 仕事中心になりすぎると自分の中で仕事と育児のバランスがとれなくなり, 父親自身が困惑した状況になりやすい。日本労働研究機構による調査では, 「仕事の影響で育児に満足していない」が約4割であり, 企業が行う育児支援制度のうち「1日あたりの勤務時間の短縮」や「残業の免除」の利用希望もあった<sup>19)</sup>。また, 子どもが NICU に入院している場合, 仕事が繁忙になりすぎると物理的に面会に行けず子どもとの距離感が大きくなるが, 適度な勤務時間は子どもと関わる時間や精神的ゆとりの確保にも繋がる。これらより, 父親が NICU に入院した児と関わる時間や育児に従事する時間を持ち, かつワーク・ライフ・バランスが保てるような柔軟な職場支援とさらなる社会的気運の醸成が父子間の愛着形成に求められる。

育児支援では祖父母(父親自身の親)の支援がある人が MAI-J 増加群に多かった。大北の報告では, 早産児をもつ母親は妊娠期・子どもの入院期・育児期の全時期において実母によるサポートに満足しており, 母親自身の良き理解者であり, 母親のニーズに合ったサポートを提供してくれる存在であった<sup>20)</sup>。一方, 義母からのサポートは不満であるとの回答もあった。このことは, 父親にも同様のことが考えられる。ほとんどの父親は仕事を抱えながら NICU に入院した児の父親役割をも担っている。そのため, 父親のニーズに合ったサポートをしてくれる祖父母(父親自身の親)の存在は心強く, 父親は安心して仕事に専念できることで, 子どもにも関心が向きやすくなり, 愛着形成に繋がると推察される。

職場支援では, 看護休暇を取得する人が MAI-J 増加群に多い傾向がみられた。ベネッセの調査報告では, 改正育児・介護休業法の利用希望のうち看護休暇が73.2%を占めていた<sup>21)</sup>。しかし, 実際の職場での休暇の使いやすさは2~3割であり, 利用希望と実際の利用しやすさとのギャップがみられた。育児をしながら就労する親にとって, 突発的に仕事を休まなければならないケースもある。よって, この制度がより利用しやすく整備されることで, 父親は自身の手で病気

の子どもを看護でき, 普段と異なる心の交流が生まれて父子間の愛着をより強固なものにできると考える。

以上より, NICU に入院した早産児に対する父親の愛着について, 家族の特性, 子どもの特性, 夫婦の関係性とは明らかな関連性がなかったが, 父親の特性や育児・社会支援が影響することが示唆される。したがって, 看護師は父親とのコミュニケーションを積極的に図り, 父親の育児状況や父親自身への育児支援, 就業状況や職場での支援状況について情報収集し, 個別に関わっていくことが愛着形成の促進に重要といえる。

## VII. 結 論

1. NICU 入院時から退院時までの父親の愛着の変化では, 退院時で有意に高くなっていた。
2. 父親の特性では, 「勤務時間」が短いこと, 「育児時間」が長いこと, 社会支援では育児支援者で「祖父母(父親自身の親)」の支援があること, 職場支援では「看護休暇」を取得していることが, 愛着形成における関連要因として示唆される。家族の特性, 子どもの特性, 夫婦の関係性では明らかな関連要因はみられなかった。

## VIII. 本研究の限界と今後の課題

本研究の縦断的調査では, 入院時と退院時の愛着の変化とその関連要因が明らかになったが, 一施設での調査で対象者数も少なく, また今回, 愛着の指標として使用した MAI-J は本来母親を対象に開発されたものであるため, 結果を一般化できない。今後, MAI-J の父親への適応について検証しつつ, 異なる病院でも調査を重ね, 愛着を促進させる関連要因をさらに詳しく分析していくことが課題である。

## 謝 辞

NICU 入院時と退院時に不安な思いを抱えながらも, 縦断的研究にご協力いただきました早産児のお父様方, また施設のスタッフの皆様は心より深謝申し上げます。

なお, 本研究の一部を第22回日本新生児看護学会にて発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

## 文 献

- 1) 辻野順子, 雄山真弓, 乾原 正, 他. 母親の胎児及び新生児への愛着の関連性と愛着に及ぼす要因—知識発見法による分析—. 母性衛生 2000; 41 (2): 326-335.
- 2) 南田智子. 分娩直後の早期接触における母親の児に対する愛着形成因子. 母性衛生 2008; 49 (1): 120-129.
- 3) 大神純子. 新生児への早期頻回タッチングが初産婦の愛着形成におよぼす影響—状態不安と愛着形成の関連—. ペリネイタルケア 2005; 24 (12): 84-90.
- 4) 竹内 徹. 早産児の臨床上的問題点と予後. 仁志田博司編著. 未熟児看護の知識と実際. 改訂3版. 大阪: メディカ出版, 2003: 154-168.
- 5) 意東直子. 父性意識の向上を目指して—カンガルーケア実施による心理的变化と愛着形成の影響について—. 周産期医学 2007; 37 (8): 1049-1053.
- 6) 根元さや香, 新山陽子. 父親の愛着形成の促進—ベビーマッサージの効果—. 第39回母性看護, 2008: 108-110.
- 7) 三井(中浦)由紀子. 第1子の早期育児期における父親の家庭内役割行動及びその関連要因. 神大保健紀要 2005; 21: 63-76.
- 8) 関森みゆき. NICUにおいて早産児の父親が育む我が子との関係性. 日本新生児看護学会 2006; 13 (1): 2-7.
- 9) 川井 尚. 育児における父親の役割. 小児保健研究 1992; 51 (6): 671-678.
- 10) 日本小児看護学会. 小児看護事典. 東京:へるす出版, 2007.
- 11) 諸井克英. 家庭内労働の分担における公平性の知覚. 家族心理学研究 1996; 10 (1): 15-30.
- 12) ベネッセ次世代研究所. 第一回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査報告書(妊娠期~0歳時期). 東京, 2009: 53.
- 13) 田中美樹, 布施芳史. 「父親になった」という父性の自覚に関する研究. 母性衛生 2009; 50 (2): 71-77.
- 14) Jennifer R, Sullivan. Development of Father-Infant Attachment in Fathers of Preterm Infants. NEO-NATAL NETWORK 1999; 18 (7): 33-39.
- 15) 橘 千恵, 中村絵里子, 中島夕美, 他. 夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連—妻との比較—. 母性衛生 2008; 49 (1): 65-73.
- 16) 中島登美子. 母親の愛着尺度日本版の信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌 2001; 21 (1): 1-8.
- 17) 中村啓人. 児との接触が父親に与える影響—対児感情評定尺度を用いて—. 小児看護 2006; 37: 20-22.
- 18) 福丸由佳, 無藤 隆, 飯永喜一郎. 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観, 子ども観—父親の育児参加との関連. 1999; 10 (3): 189-198.
- 19) 日本労働研究機構. 育児や介護と仕事の両立に関する調査. 2003.
- 20) 大北真弓, 杉本洋子. 早産児をもつ母親の不安とソーシャルサポートとの関連—妊娠期・児の入院期・育児期—. 三重看護学誌 2011; 13: 9-20.
- 21) ベネッセ次世代育成研究所. 第2回乳幼児の父親についての調査. 2010.